

ラグビー部の創設



広岡久右衛門

同志社フットボールの歴史は古く、明治二十二年、神学部主任の米人バートレット教授によってアソシエーション・フットボール、今のサッカーが輸入せられて以来明治四十四年の春頃まではずっとア式蹴球時代で、しかも近畿における強豪をもって鳴り、アソシエーションからラグビーへの転向の有力な下地ができていたといえる。

しかるに四十四年の夏休が終わって二学期が始まると共に、私の同級生で故人となられた松田守三君が同郷でしかも遠縁にあたる慶応ラグビー選手からいろいろとラグビーの良さや面白さを説き聞かされて熱心なラグビーファンとなり、

当時ア式蹴球部のキャプテンだった私や幹部の連中にラ式蹴球採用のことを熱心に持ちかけて来たので、同級生の若月五十四郎、木原竹一、それから一、二級下の大脇順路らの選手や部員ともよく相談のうえ、全員の賛成を得て慶応の選手を招きラグビーのルールや競技の方法についての解説を聞くと共に、同志社より一年早くラグビーを始め

因みに同志社はこれによって学制改革による三高の廃止に伴い、明治三十二年にラグビーを採用した慶応について日本最古のラグビーの歴史を有する大学となったのである。

*
その頃、同志社のグラウンドは相国寺の竹藪を切り開いた石ころの多いグラウンドで、しかもラグビー用のゴールポストも未だ建てられていなかった時代であったのと、一時も早くラグビーの一通りをマスターしたいという願望から、時々放課後にスポーツシャツ姿で隊伍を整えて校門を出て、鴨川にかけてある出町橋を渡り、当時吉田まで見渡す限りの田畑の中の小路を、比叡下ろしの寒風に吹かれながら疾走して三高校庭に到着後、三高との合同練習に励み、練習がすむと再びもと来た道をランニングで帰途に着いたもので、部員の中にはこのようなハード・トレーニングと兄貴顔をして威張る三高選手の態度に憤慨して落伍する者もあったのである。しかし皆ラグビーの習得に熱心だったのとアソシエーションの素地があったからタッチキック、プレスキック、ドリッブル等の足技は早く上手になることが出来たのである。

そして明治四十四年の秋十一月、三高側の挑戦に応じて行なった三高との最初の練習試合には16対6で敗退したが、これはラグビーを始めて間もないことだったので当然の結果といえる。選手一同は臥薪嘗胆、今に三高に追いついて見せるぞとお互に誓いながらもまずまず結束を固めて練習に精進して行ったのである。

翌四十五年一月八日雪解けの三高校庭で行なわれた最初の対慶応戦には24対3のスコアで敗北したが、何しろ相手の慶応は三高や同志社より十年以上も古くからラグビーを始めている先輩であって、神戸外人チームと対戦するため西下の途中、同志社に挑戦して来たものであり、当方はラグビー開始後わずか三、四ヶ月、未だルールや競技の進め方が十分に呑み込めていない臨時編成のチームなので無我夢中の応戦だったから敗北もいたしかたなかった次第である。

その時の慶応のキャプテンは後に日本ラグビー協会の理事長や会長をされた田辺熊三君HBは西部ラグビー協会の会長になられた杉本貞一君、TBには甲斐、北野らの俊足、FBには一昨々年故人になられた元駿河銀行頭

取の岡野君ら当時の名選手をすらすらと並べた布陣だったのであるが、これに対し同志社は前述のごとく急に編成した臨時チームだったので、当日のキャプテンには最年長者の松田守三君を押し、露無と共にHBのポジションに着いて貰い、TBには左から右へ大脇、広岡、木原、若月、FBには鈴木三郎君、そしてFWには部員の中から重量があり馬力の強い者をピックアップして対戦したのであるが、試合の経験に乏しい同志社軍は老練な慶応軍に押しまくられて敗北を喫したのである。しかし駿足大脇ウィングの足を生かしてワントライをあげたのは、強敵慶応に対する緒戦としてはむしろ上出来だったといえるのである。

なおその時着用の同志社のユニフォームは濃い青色のメリヤス地で胸のまん中に白いローマ字Dのマークを縫いつけたものだったが靴をはいている者はなく、みな地下足袋だったのである。同志社と慶応との定期



岩倉グラウンドでの練習風景(昭和38年秋)

戦は今年で何回になるか知らないが日本の大学では最古のもので、この時の試合が両大学定期戦の第一回になっていると思う。

*

この慶応との試合は同志社にとって非常に良い参考になり、また強い刺激にもなったのであって、爾後、選手一同結束を固めてラグビーの研究と練習に精進し、同志社ラグビーチームの強化に邁進することになり、まずその手始めに蹴球部を改組して、ア式とラ式との併用を止めてラグビー一本建とし、初代の部長に飯塚先生、キャプテンに私広岡（旧姓三沢）が就任したのである。爾来若月、木原大脇、美濃部、露無、鈴木らの諸君の協力を得て同志社独自の練習に努め、夕暗迫り月がほのかに彰栄楼を照らし始めるのを忘れるほどの熱心さだったのであるが、これを歌った流行歌調のものとの試合の時の応援歌とが私の古い記録の中から発見された。いずれも私の拙作であって前者はスキ焼パーティー等くつろいだ時に唄うものであり、後者は試合に臨む選手の士気昂揚のための作歌だったのである。

ラグビー部応援歌

（曲「敵は幾万ありとても」）

我等は同志社健男兒 比叡風にきたえたる
手なみを見せるは此時ぞ いざや來れ敵
いざいざやパッサオン

いざいざやキックオン
進めや進めドリッブル

いでや突破せん敵塁を
懇親会用の歌（曲「ラップ節」）

疲れし身体を桜花 花下陰によこたえば
早や月照らす彰栄楼

これぞ吾等が練習振り
ただ見る白雪凱々の

シベリア荒野を横断し
さして行くのはそも何処

ラグビーで名高いオックスフォード以上のごとく若き日の情熱を傾けての猛練習と打倒三高に燃える旺盛なる闘志によって選手の間もとりて上達、チームの結束もますます強固となり、明治四十五年二月十一日、三高校庭で開催された第一回の対三高公式戦には13対0で敗北したが、大正元年十一月三十日、同志社校庭に三高を迎えての第二回戦では、終始敵を圧迫しながら惜しいところで長蛇を逸して両軍無得点の引分に終つたのである。

しかしこの試合で大分自信を得たので、当時、無敵常勝を誇っていた神戸外人チームと大正二年一月十八日神戸東遊園地のグラウンドで名レフリーとして知られたスペンス氏審判の下に初めて一戦を交えたのであるが、その結果は18対3で敗北した。しかし慶応も未だ成し遂げ得なかつた日本人チームとしての最初のトライをあげ、英文神戸クロニクル紙に賞賛の記事が大きく掲載されるや、その記事を同志社女学校のデントン女史が読んで大変喜ばれ、当時、男子禁制の女学校内のデントンハウスに選手一同を招待して祝賀パーティーを催され、女学生のサービスで歓待して下さったことが嬉しい記憶として甦えつつくるのである。

もちろんその時が外人との初試合だったが敵のFWはいずれも二十貫以上三十貫近い巨漢ばかりで、腰から上のタックルでは二、三人一緒に引きずって行かれる始末、またTBにはユリオン、クレイン、エビラハムらの俊足揃いでわが軍は防戦におわれるありさまだつた。しかしわが軍中堅のタックルはよく敵の突進を防ぎ得て漸次これを盛り返し、長

駆敵の陣地深く突入し10ヤードライン近くの

タイトスクラムからきれいに球がセンタースリーの私に渡り、それをうまく左ウィングの大脇にパスしたので、俊足の彼は敵のマークをはづしてかなりの距離を独走してワントライを酬いることが出来た。メンバーは、
FW 美濃部、一の宮、山村、陳、田井、吉田、鈴木兄、鈴木弟

HB 露無、東

TB 大脇、広岡、木原、若月

FB 鈴木三郎

この時、同志社の選手でラグビー用の運動靴を履いている者は大脇一人、他はみな地下足袋だったので、足を踏むのが心配だから次回から靴をはいてくるように言われたのと柔道の手で相手を投げ飛ばすのをやめて欲しいと注意されたこと等が今更のごとく思い出されておかしくなるのである。また、その頃のユニフォームは赤と黒との横の縞模様になっていたと記憶する。

その後、神戸外人チームとは私のキャプテン在任中に一、二回試合をしたが、FBに新人を採用したためミスが多く、勝てる試合にも負ける結果となつてしまつた。

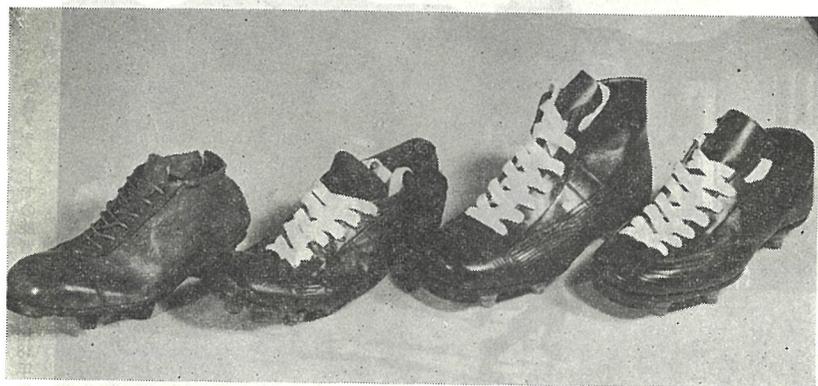
次に翌大正三年二月に第一回の東都遠征を

企て、私は大学卒業直前だったのでノンプレイングキャプテン兼監督として大脇以下のチームをひきいて、まず横浜外人チームと根岸のグラウンドで親善試合を行ない17対3で敗退後、二月十一日の紀元節に慶応チームと対戦、霜解けの三田綱町のグラウンドで泥濘の中を泥まみれになりながら悪戦苦闘、0対0の無勝負に終つたのである。私はこれを最後にキャプテンを大脇順路君に譲つて三月に同志社大学経済科を卒業した。当日の出場選手は次の通り、
EW 山村、美濃部、陳、田井、一の宮、吉田、鈴木兄、鈴木弟

HB 露無、東
TB 大脇、大脇弟、木原、若月
FB 石木

私の卒業後は選手諸君の一糸乱れぬ結束と創立当初からの猛練習がようやく実を結び、大正三年秋の対三高戦には30対0のスコアで大勝し、爾後数年間、同志社ラグビー初期の黄金時代を現出するに至つたのである。

（大13大経卒・大同生命保険相談役）



ラグビースーツ—左から 大正2年ごろ、昭和6年ごろ、現在使っているもの（右二つ）